

日本マス・コミュニケーション学会 36 期第 9 回研究会（メディア史研究部会企画）

「録音構成の成立～戦時下の録音放送の意義」

日時：2018 年 7 月 28 日（土）13:00～16:00

場所：関西大学東京センター

東京都千代田区丸の内 1-7-12 サピアタワー9 階・教室 1

<http://www.kansai-u.ac.jp/tokyo/map.html>

※サピアタワー3 階にて入館の手続きを行った後、会場までお越してください。

報告者：大森淳郎（日本放送協会）

司会：松山秀明（関西大学）

企画の意図：

戦時下のラジオ放送は政府によって管掌され、戦争協力をしていた事実はすでによく知られている。とりわけ 1937 年以降、録音機は戦場へ出かけるようになり、国民に「前線録音」を伝えるようになった。戦時下のラジオは、戦闘の様子や兵士たちの労苦といった前線での録音を、銃後の国民に向けて放送し、戦意を煽ったのである。

ここで注目すべきは、この可搬型録音機の登場が、新しいラジオ表現を生むきっかけとなったことである。つまり、戦場で録音した現実の断片を編集し、構成する「録音構成」がこのとき誕生した。当時、ラジオ放送の現場では、政府や通信省の指導・検閲を受けつつも、番組表現の幅を広げていったのである。

本研究会では、1941 年 5 月に放送された、日本放送協会制作の特集番組『病院船』を手がかりにして、戦時下に生まれた録音放送による新しい表現方法について考えていきたい。当時の放送現場が政府の指導を内面化しつつ、いかにして新しい表現を生みだすようになったのか、前線と銃後をつないだ戦時下の録音放送の可能性について議論したい。

報告者の大森淳郎氏（日本放送協会）は、上記をテーマに「シリーズ 戦争とラジオ」を NHK 放送文化研究所編『放送研究と調査』に執筆してきた（2017 年 8 月、9 月、12 月、2018 年 1 月号）。長年、番組制作に携わってきた大森氏から、戦時下の録音放送がもつテレビ・ドキュメンタリーの源流としての意味について報告を行う。そのうえで、これまでのラジオ研究を総括しつつ、戦時下の録音放送番組を研究することの意義についても議論したい。

以上